

私は、本校に赴任した際、「過去をリスペクトし、未来に責任をもつ」と所信表明で話した。「過去をリスペクト」ということに関して、当時、先生方が大切にしている言葉は何かを探った。これは、校訓のようなものではなく、日常の学校生活の中に普段使われるものである。しばらくして、「大切なひとり」という言葉に出会う。先生方も気に入っているような感じを受けた。この言葉の定義を学校教育目標に結びつけることが大切だと思った。「大切なひとり」とは「自己の存在意義を深く認識する」ことであり、このことにつながる教育活動が「過去をリスペクト」になり、生徒の未来にもつながる教育実践の「未来に責任をもつ」になると思った。それは難しいことではなく、例えば「凜ちゃんを探せ（いいところ探し・ありがとうカード）」や、私たちが職場で同僚に「ありがとう」を言うことが、一番つながる実践になると思った。

先月、宇美町の教育長の折居氏（仲の良い後輩）が来校された。実は、7月に宇美町の中学校で音楽の先生が足りないという相談を受けていた。この件を、本校の音楽科卒業生会代表田口氏に協力依頼し、その甲斐あって無事に決まったことのお礼に来られた。折居氏と田口氏と私で雑談する中で、折居氏が会話の中で「唯一無二」という言葉を使った。その時、音楽科卒業生代表田口氏が・・・

（田口）「重枝校長、ジャズの演奏後、拍手する時、どんな掛け声をして拍手するか知っていますか？」

（重枝）「知らないなあ」

（田）「“One&Only！”って叫びながら拍手するんですよ」

（重）「自由に自分らしく演奏するから、唯一無二って言うのか」

（田）「そうです。他のはいらねーよ、他とは違う、みたいな意味もあるそうです」

（重）「自己存在価値観の“大切なひとり”や他者の足を引っ張る必要がないというマインドセットにもつながる感じがする。生徒や先生たちに“One&Only”の言葉を発信して、自分らしく大丈夫というマインドをセットしたいな」

〈実は、2002年から3年間、女学院大学の広報でこの言葉を使っていたこともわかった（守山院長が教えてくれた）〉

これまでの校長研修だよりで「大切なひとり」を検索したら、23の号でヒットした。やはり意識してこの言葉を使おうとしていることがわかる。以下、その一部を抜粋する。

◆「自分はいったい何者か？」という問いを生徒に投げかけた際、生徒から、自己評価が低いネガティブな反応が返ってくることはないか。生徒たちには不安や悩みがある。それは当然のことなのだが、それを解決する力が未発達な状態では、自分の存在意義を肯定的に捉えることは難しく、「大切なひとり」にはならない。（だから「いいところ探し」）（206）

◆私たちは、この「新学習指導要領」と、本校の最上位の目標である「自律的学習者（自ら学ぼう、自分で決める、“成長はたし算”というマインド）」、さらには、「大切なひとり（序列化ではない、自己の存在意義を深く認識する）」を育成するという“筋”をもって、未来を選ばなくてはならない。（190）

◆そんな11名が少しずつチーム内での役割が生まれ、それぞれが自己存在価値感をもてるようになり、組み合わせさった。つまり「大切なひとり」として存在していた。私たちの仕事もそういうスタートであるかもしれない。しかし先生たちならしっかり組み合わせさって、個人の力量を足したものの以上の組織になると思っている。（189）

◆「ありがとうは魔法の言葉」というフレーズを聞く。言われた側は「喜んでもらえてうれしい」という気持ちになるのは当然だが、言った側も無意識的に自己肯定感が高まる。このことは、本校の「大切なひとり」につながるということを、私たちは強く認識しなければならない。つまり、「大切なひとり」というワードを誇りにするなら、「ありがとう」を毎日どれだけ用いているかを、教師も生徒も自己点検しなくてはならないと思う。その実践は、私たちみんなの心の状態をよくしていく。（172）

◆「ビーイング」とは、「自分の生き方・あり方」のことになるが、生徒は多感なこの時期に、他者と関りながら、「自分はどうかありたいか？」と自問自答を繰り返す。そして、自己存在感を高めていく。これが「大切なひとり」につながる。「他者と関りながら」の「他者」には、私たち教師もいる。私たち教師自身の「ビーイング」は生徒に大きく影響する。(182)

◆私たちの教育活動において、生徒自身がもっている「強み」を、生徒自身に自覚させることがある。これは、生徒の自己存在価値(大切なひとり)をもたせることになる。私たちはこのことを、本校の最上位の目標と捉え、「大切なひとり」というシンボルワードで発信している。(171)

◆生徒たちにも、もちろんゆとりは大切である。そうでないと、最上位の目標である「自律的学習者」にはつながらない。生徒自身が、自分で決めたり、自らチャレンジしたりしなければ、主体性は育たない。自分の存在価値をもつ「大切なひとり」にはなれない。(168)

◆世界の学校は、この部分が優れている。マインドセットを重視している教育である。生徒に「自分は何者か」に気付かせようとする教育である。本校で言う「大切なひとり」につながる。(166)

◆まずは、【生徒指導の定義】について読むと、これは、「社会の中で自分らしく生きることができる存在に成長させる」ことを書いている。これは、本校の「大切なひとり」につながる。(160)

◆本校には「大切なひとり」というシンボルワードがある。これは、生徒一人一人に自分の存在価値を持たせるための言葉である。ここで「大切な音楽科」という言葉を発信する。「大切なひとり」と同様に、本校の存在価値を与えてくれる音楽科を今後とも全職員で発展させていく。(158)

◆中高時代というのは言うまでもなく大変難しい時代である。それは特定の個人の問題ではなく、誰でも、いつの時代でも同じである。生徒が、他の誰にとって代わることができない確立した一人の個人となるための格闘の期間だからである。その中で、自分自身の人生の核になる部分を作り上げていく。本校の「大切なひとり」とはそういう意味である。その手助けをしていくのが本校教師の役割である。教師は専門の学問を教えるが、それ以外に社会との橋渡しをしたり、人生の先輩としての経験などをいろいろな場面を通して教えたり、見せていくことになる。(141)

◆非認知スキルの自己効力感を育むために、自己有用感を、活動を通して互いに言葉にして認め合いをすることは、「大切なひとり」につながる。(99)

◆年度初めの校長研修で話したが、本校のシンボルワードである「大切なひとり」を本年度のシンボルワードにした。この「大切なひとり」とは、「生徒の自己肯定感・自己有用感を高め、存在価値観をもたせることである」と説明した。ワクワクする学校をつくることで、一人一人のワクワクをもっと広げてくれると思う。その一つの取組が、昨年度から始めた「学校長表彰」である。生徒が学校外でも、凜として、思いやりのある行動をした場合に表彰するものである。そのうち、生徒会の生活委員長あたりが、「凜ちゃんをさがせ」という、仲間のいいところ探しをしてみたらと思う。きっと学校全体がワクワクする。学校をワクワクさせるのが生徒会の仕事である。そして、「凜として」や「大切なひとり」というシンボルワードを、いつでも、どこでも、生徒とともに私たちも言葉にしていく。(66)

◆自律的学習者を育てるデザインの基盤となる4つのマインドを、このデザインのバックボーンで示す。4つのマインドとは、「自己承認(大切なひとり)」「内発動機(やってみよう)」「他者尊重(ありがとう)」「未来志向(ワクワク)」である。(51)

◆学校や学級は一つの小さな社会である。それなら生徒に「今、このクラスをどうすればみんなが居心地よく過ごせるか」を考え抜かせてほしい。これは、生徒にとって手の届く範囲のことである。今いる場所を、自分にも相手にも居心地よくしていく。そして、そのことは、自分と違う誰かとどんな関係をつくっていくかという原体験になり、「大切なひとり」を認め合うことにつながる。(39)